引 用 文 献

安部恒久（1982）「エンカウンター・グループにおけるファシリテーターに関する研究」『中村学園研究紀要』15,1-15.

安部恒久（1984a）「登校拒否児を持つ母親に対するグループアプローチ」『人間性心理学研究』2,110-120.

安部恒久（1984b）「青年期仲間集団のファシリテーションに関する一考察」『心理臨床学研究』1(2),63-71.

安部恒久（1996）「エンカウンター・グループにおけるファシリテーターに関する研究（II）－＜同じ＞と＜違い＞を鍵概念として」『中村学園研究紀要』28,11-18.

安部恒久・村山正治（1978a）「集中的グループ経験におけるグループ・プロセスに対するファシリテーターの働きかけに関する一考察」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』23(1),69-76.

安部恒久・村山正治（1978b）「集中的グループ経験におけるファシリテーター体験の明確化に関する一考察」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』23(2),35-40.

Bion, W. R.（1961）"Experiences in Groups" Basic Books Inc., New York.

土居健郎（1996）「甘え理論と集団」『集団精神療法』12(1),11－17.

福井康之（1997）『人間関係が楽しくなるエンカウンター・グループへの招待』新水社.

Gendlin, E. T.（1964）"A Theory of Personality Change"（In Worchel & Byrne (Ed.), Personality Change, John Wiley & Sons）（ジェンドリン（1966）『体験過程と心理療法』村瀬孝雄訳、ナツメ社）.

Gendlin（1981）Focusing, New York, Bantam Books（ジェンドリン（1982）『フォーカシング』村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳、福村出版）.

Gendlin, E. T.（1988）"Carl Rogers", American Psychologist 43(2),P.128.

畠瀬稔（1977）「グループ促進の方法」佐治守夫・水島恵一編『心理療法の基礎知識』有斐閣,139-140.

畠瀬稔（1980）「エンカウンター・グループ経験による教師の対人能力の促進に関する研究」日本心理学会第44回大会発表論文集,642.

畠瀬稔（1981）「エンカウンター・グループ経験による教師の対人能力の促進に関する研究（II）」日本心理学会第45回大会発表論文集,657.

畠瀬稔（1999）「社会的問題へのグループ・アプローチ　－ロジャースの社会的・国際的葛藤解決への実践を中心に」『現代のエスプリ（野島一彦編「グループ・アプローチ」）』385,178-186.

畠瀬稔（2000）『鋼鉄のシャッター　－北アイルランド紛争とエンカウンター・グループ

（ビデオ）』心理メディア研究所.
林もも子（1989）「エンカウンター・グループの発展段階尺度の作成」『心理学研究』60(1),45-52.
林もも子（1990）「エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の重要性」『心理学研究』61(3),184-187.
林もも子（1993）「1980年代以降の集団精神療法におけるコ・セラピスト論の展望　ーエンカウンター・グループの立場から」『東京大学学生相談所紀要』8,62-66.
林もも子（1998）「エンカウンター・グループ再考」『集団精神療法』14(1),33-41.
平山栄治（1993）「エンカウンター・グループにおける個人過程測定尺度の作成とその検討」『心理学研究』63(6),419-424.
平山栄治（1994）「不安を生きるファシリテーション」平山栄治・中田行重・永野浩二・坂中正義（著）「小企画：研修型エンカウンター・グループにおける困難とファシリテーションについて考える（第５章）」『九州大学心理臨床研究』13,128-130.
平山栄治（1998）『エンカウンター・グループと個人の心理的成長過程』風間書房.
平山栄治・村山正治（1994）「自己理解の促進を自発性の促進にいくらか優先させることを試みた研修型エンカウンター・グループの一事例」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』37（1･2),83-94.
広瀬寛子（1998）「臨床家として大事にしたいことーがん医療の中で考えていることー」『治療の声』1(2),225ー234.
袰岩秀章（1999a）「グループの構成、非構成に関する考察」『日本女子大学カウンセリングセンター、カウンセリングセンター報告』23,1-5.
袰岩秀章（1999b）「平和とグループ・アプローチ」『現代のエスプリ（野島一彦編「グループ・アプローチ」）』385,196-204.
保坂亨（1983）「エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの問題について」『心理臨床学研究』1(1),30-40.
保坂亨（1985）「エンカウンター・グループにおけるセッション外活動の影響　ー参加メンバーによる事例報告ー」『人間性心理学研究』３,46-57.
伊藤義美（1991）「大学生とのエンカウンター･グループ」村山･見藤･野島･渡辺（編著）『エンカウンター・グループから学ぶ（第４章）』九州大学出版会,57-73.
伊藤義美（1997）「心の空間づくりとコミュニティグループ」『集団精神療法』13(2),191.
伊藤義美･増田実（1988）「箱根方式による学生エンカウンター･グループの事例研究　ー精神障害を持つ参加者の影響とその対応ー」『人間性心理学研究』6,36-48.
岩村聡（1990）「あたたかいグループへのファシリテーション」『広島大学総合科学部学生相談室活動報告書』14,6-26.
河合隼雄（1976）『母性社会日本の病理』中央公論社.

河合隼雄（1992）『心理療法序説』岩波書店.

小谷英文（1976）「エンカウンター・グループ（d）逆効果に関する臨床心理学的研究」広島大学総合科学部学生相談室『学生相談活動報告』1.

Lieberman, M. A., Yalom, I. & Miles, M.（1973）"Encounter Groups: First Facts" Basic Books Inc., New York.

増田實（1999）「パーソンセンタード・アプローチ」『現代のエスプリ（野島一彦編「グループ・アプローチ」）』385,65-77.

宮崎伸一郎（1983）「看護学生エンカウンター・グループにおけるファシリテーションの方法に関する一考察」『九州大学心理臨床研究』2,77-87.

村山正治（1977）「エンカウンター・グループ：序論」村山正治（編）『エンカウンター・グループ（第1章）』福村出版,11-22.

村山正治（1990）「エンカウンター・グループ」上里・鑪・前田（編）『臨床心理学体系8、心理療法2（第X章）』207-232.

村山正治（1992）『カウンセリングと教育』ナカニシヤ出版.

村山正治（1993）『エンカウンターグループとコミュニティーパーソンセンタードアプローチの展開』ナカニシヤ出版.

村山正治・樋口昌巳（1987）「体験過程の促進からみたエンカウンター・グループ－体験過程スケールによるエンカウンター・グループ過程の分析－」『人間性心理学研究』5,88-98.

村山正治（2001）「事例研究　－エンカウンター・グループの視点から事例研究の意義をめぐって－」『臨床心理学』1(1),41-46.

村山尚子（1997）「パーソンセンタードコミュニティの変化生成のプロセス」『人間性心理学研究』15(1),30-38.

Murayama,S. & Nakata,Y（1996）"Fukuoka Human Relations Community: A Network Approach to Developing Human Potential", Journal of Humanistic Psychology, 36(1),91-103.

村山正治・野島一彦（1977）「エンカウンターグループ・プロセスの発展段階」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』21(2),77-84.

永原伸彦（1986）「私のファシリテーター論」人間関係研究会『ENCOUNTER 出会いの広場』3,2-4.

永野浩二（1994）「研修型エンカウンター・グループでの感情表現とグループの方向性」平山栄治・中田行重・永野浩二・坂中正義（著）「小企画：研修型エンカウンター・グループにおける困難とファシリテーションについて考える（第3章）」『九州大学心理臨床研究』13,124-127.

中田行重（1992）「エンカウンター・グループの研究と実際」『人間性心理学研究』10(1),25-29.

中田行重（1993）「エンカウンター・グループのファシリテーションについての一考察」『心理臨床学研究』10(3),53－64.

中田行重（1994a）「研修型エンカウンター・グループに特有の動き及びその構造について　－参加への合意に関する問題－」平山栄治・中田行重・永野浩二・坂中正義（著）「小企画：研修型エンカウンター・グループにおける困難とファシリテーションについて考える（第２章）」『九州大学心理臨床研究』13,122-124.

中田行重（1994b）「ファシリテーションについて」人間関係研究会『ENCOUNTER 出会いの広場』19,48-52.

中田行重（1994c）「エンカウンター・グループの事例研究 high learner について」日本人間性心理学会第13回大会発表論文集,34-35.（1994年９月、東京農業大学）.

中田行重（1996）「エンカウンター・グループにおけるセッション外体験の意義」『人間性心理学研究』14(1),39-49.

中田行重（1999）「研修型エンカウンター・グループにおけるファシリテーション　－逸楽行動への対応を中心として」『人間性心理学研究』17(1),30-44.

中田行重（印刷中）「ファシリテーターの否定的自己開示」心理臨床学研究.

人間関係研究会（毎年）「人間関係研究会ワークショッププログラム」人間関係研究会.

野島一彦（1980）「看護学生のエンカウンター・グループに関する研究」『福岡大学人文論叢』12(3),635-672.

野島一彦（1982）「看護学校におけるエンカウンター・グループの事例研究」『福岡大学人文論叢』14(3),695-731.

野島一彦（1983）「ある Low Development Group の事例研究　－看護学生のエンカウンター・グループ」『福岡大学人文論叢』14(4),1307-1345.

野島一彦（1984a）「導入期をうまく経過できなかったエンカウンター・グループの事例研究」『福岡大学人文論叢』15(4),1223-1261.

野島一彦（1984b）「ある Middle Development Group の事例研究　－動機づけが低い看護学生のエンカウンター・グループ」『福岡大学人文論叢』16(3),995-1032.

野島一彦（1989a）「わが国の教師教育とグループ体験学習」『福岡大学総合研究所報』118,19-64.

野島一彦（1989b）「エンカウンター・グループ」『心理臨床』2(4),295-300.

野島一彦（1990）「養護教諭の研修エンカウンター・グループ　－ヘルスカウンセリング講座の『カウンセリングの実習』－」『福岡大学総合研究所報』126,23-42.

野島一彦（1991）「養護教諭の研修エンカウンター・グループに関する事例研究」『福岡大学総合研究所報』134,19-52.

野島一彦（1993）「教師の研修エンカウンター・グループ事例」『福岡大学総合研究所報』153,49-83.

野島一彦（1994）「看護学生の研修エンカウンター・グループ　－Low　Development

Group の事例研究」『福岡大学人文論叢』25(4),1577-1609.
野島一彦（1995）「ある養護教諭のエンカウンター・グループ経験とその後の変化」『福岡大学総合研究所報』177,21-52.
野島一彦（1996a）「あそびが特徴的な看護学生のエンカウンター・グループ　－Middle Development Group の事例研究－」『福岡大学人文論叢』27(4),1731-1772.
野島一彦（1996b）「日本におけるベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーション論の展望」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』41(1),63-70.
野島一彦（1997）「わが国のグループ・アプローチの最近の動向　－1993～1996の文献リストより」『九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）』42(1),1-7.
野島一彦（1998）「エンカウンター・グループの発展段階におけるファシリテーション技法の体系化」博士論文.
野島一彦・岩村聡（1994）「エンカウンター・グループ」山口隆（編）『集団精神療法的アプローチ』集団精神療法叢書,459-468.
野島一彦・村山正治（1977）「教師のエンカウンター・グループ　－福岡プロジェクト」『九州大学教育学部心理教育相談室紀要』3,4-16.
尾川丈一・飯島修治（1990）「エンカウンター・グループにおける『スリーテン』導入の試み」『人間性心理学研究』8,100-107.
岡村達也（1990）「グループ経験」小川・鑪・本明（編）『臨床心理学体系13,臨床心理学を学ぶ（第Ⅴ－2章）』207-232.
小野修（1981）「登校拒否児の治療　－親のグループ・セラピィ」『第3回心理臨床家の集い発表論文集』84－85.
小野修（1986）「登校拒否児の治療　－親のグループ・セラピイによる治療経験より得たものー」『人間性心理学研究』4,65-71.
小野修（1994）「子どもと共に成長する親たちのグループ　－援助者のためのマニュアルー（改訂増補）」『人間関係研究会資料』,No.11.
小野修（2000）『子供とともに成長する不登校児の親のグループ』黎明書房.
Ormont, L. R.（1995）“Cultivating the Observing Ego in the Group Setting” International Journal of Group Psychotherapy, 45(4)489-506.
大須賀発蔵・大須賀克己（1977）「私のファシリテーター体験Ⅱ」村山正治（編）『エンカウンター・グループ（第10章）』福村出版,158-17.
大築明生（1996）「非自主参加型のエンカウンター・グループの研究」『茨城カウンセリングセンター研究会資料』未発表.
小柳晴生（1993）「私のエンカウンター・グループ観,グループに臨む姿勢」『人間性心理学研究』10(2),79-83.
Rogers, C. R.（1942）“Counseling and Psychotherapy” Houghton Mifflin（佐治守夫編　友田不二男訳［1966］『カウンセリング』ロージャズ全集第2巻　岩崎学術出版

社）.

Rogers, C. R.（1957）“The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change” Journal of Consulting Psychology, 21, 95-103（伊東博編訳［1966］「パーソナリティの変化の必要にして十分な条件」『サイコセラピィの過程』ロージャズ全集第4巻第6章　岩崎学術出版社）.

Rogers, C. R.（1967）“The Process of the Basic Encounter Group”（In Mackenzie, K.R.（Ed）, Challenges of Humanistic Psychology, McGraw-Hill, New York）.

Rogers, C. R.（1970）Carl Rogers on Encounter Groups , New York, Harper & Row（ロジャーズ［1973］『エンカウンター・グループ』（畠瀬稔・畠瀬直子訳）創元社）.

Rogers, C. R.（1985）“Toward a More Human Science of the Person” Journal of Humanistic Psychology, 25(4),7-24.

Rogers, C. R. & Rablen, R. A.（1958）“A Scale of Process in Psychotherapy” Psychiatric Institute Bulletin, University of Wisconsin（伊東博編訳（1966）「サイコセラピィの過程概念」『サイコセラピィの過程』ロージャズ全集第4巻第7章　岩崎学術出版社）.

坂中正義（1994a）「経験者と未経験者からなるエンカウンター・グループのグループ・プロセスについて」『人間性心理学研究』12(2),186-198.

坂中正義（1994b）「看護学校におけるエンカウンター・グループのプロセスとファシリテーションについて」平山栄治・中田行重・永野浩二・坂中正義（著）「小企画：研修型エンカウンター・グループにおける困難とファシリテーションについて考える（第4章）」『九州大学心理臨床研究』13,127-128.

坂中正義（1996）「ファシリテーターの時計が止まってから展開したエンカウンター・グループ」『九州大学心理臨床研究』15,53-60.

清水幹夫（1999）「国際ベーシック・エンカウンター・グループ」『現代のエスプリ（野島一彦編「グループ・アプローチ」）』385,165-177.

下田節夫（1984）「エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係について　－集団心理療法におけるコ・セラピスト論を参考に－」『東京大学学生相談所紀要』3,17-34.

下田節夫（1988）「エンカウンター・グループの『構造』について－『リーダーシップの分散』の実現を支えるもの」『神奈川大学心理・教育研究論集』6,46-64.

下田節夫（1993）「シェアード・リーダーシップの実現」人間関係研究『ENCOUNTER出会いの広場』16,2-5.

下田節夫（1994）「グループのイメージとスタッフのあり方　－非構成的エンカウンー・グループの一つの『生き方』」『神奈川大学心理・教育研究論集』12,24-35.

申栄治（1986a）「エンカウンター・グループにおけるメンバーのファシリテーター関係認

知スケール作成の試み」『心理学研究』57(1),39-42.
申栄治（1986b）「エンカウンター・グループにおけるメンバーの成長度とファシリテーター関係認知プロセス」『心理臨床学研究』3(2),38-47.
田嶌誠一（1987）『壷イメージ療法』創元社.
都留春夫（1977）「私のファシリテーター体験Ⅰ」村山正治（編）『エンカウンター・グループ（第9章）』福村出版,145-157.
Verhest, P.（1995）「パール・フェルヘルスト：エンカウンターグループにおける3次元の共感的応答」（池見陽訳）”『人間性心理学研究』13(2),286-293.
Wisdom, J.（1985）“Types of groups: transition and cohesion; emergent properties” International Journal of Psychoanalysis, 12, 73-85.
山口祐二（1982）「ファシリテーター論の試み」『九州大学心理臨床研究』1,75-85.

あ と が き

本書は私の学位論文に一部修正を加え、まとめ直したものである。まず私がこのエンカウンター・グループのファシリテーション経験を積むことが出来たのは何よりもグループのメンバーのおかげであることを記しておきたい。今まで大変多くの方々とグループをご一緒させていただき、ファシリテーターとして、また１人の個人として多くのことを学ばせていただいた。この場をお借りして深くお礼申し上げます。

なお、本書に出てくる事例では秘密保持のため出来るだけ省略・改変を行っていることを申し添えておく。

論文作成については多くの先生方にお世話になった。

村山正治先生は九州大学の学部、大学院時代からの指導教官であるが、東亜大学にお呼びいただき、同僚として働かせてもいただいた。本書のテーマであるエンカウンター・グループも私が修士の学生の時に、グループのスタッフに誘って下さったところから始まっている。それ以来、先生からいただいた刺激、支えは質量ともに莫大なものがあり、書く範囲をはるかに超えている。

野島一彦先生にも長くお世話になっている。本研究の中の事例の多くも先生が私にファシリテーターとしての実践の機会をまわして下さらなかったら、あり得なかったものである。また、ファシリテーターおよび心理臨床家としての私の成長を大学院時代からずっと見守っていただいている。その他の点でも、先生に多大な御指導・御支援をいただいている。本書の中に“多様性の共存というＰＣＡの哲学”のことを書いているが、それを私は直接には村山、野島先生の psychologist としてのあり様の中にいつも見ている。

九州大学の先生方や先輩方、後輩方にもお世話になった。九州大学は母校であり、これまでに多くの先生にお世話になっており、そこでの学びや体験

が本研究へとつながった。今回、本研究に関して特に針塚進先生にお世話になった。お忙しい中、時間をとっていただいて受けたご助言の中には、私の研究者としての姿勢について多くを気づかせていただいたものがある。私のこれからの財産である。

また、安部恒久先生、吉良安之先生、田中克江先生、大隈靖子先生、田村隆一先生には研究会の中で多くの助言や支援をいただいた。馬場禮子先生や下川昭夫先生には、論文を書く上で不安定になる私を全面的に支えていただいた。平山栄治先生、高松里先生、永野浩二先生、坂中正義先生、池田久剛先生は大学院時代からこれまで共にエンカウンター・グループをやってきた仲間である。彼らとのディスカッションが本研究のテーマをあたためさせてくれた。先生方に深く感謝申し上げます。

学位論文の作業に取りかかったのは、長女が生まれる1ヵ月前であった。論文を終えた時、娘は3才を迎えていた。論文の最終作業をしていた私に「遊ぼう、パパ」といっても、私が「もう少しだから、ね」と言うと「オシゴト？」と言っては隣の部屋で歌いながらお絵かきをしたりして待てるほどに成長していた。大事な時期に余り遊んでやれなかった。そして学位を授かって3年が経過した。

学位論文に取り組み始めてから現在までの約6年間、私は3つの大学に籍を置いている。その意味で私にとって激動の6年間であったが、激動は私の職場のことだけではなかった。社会も激動とともに新しい様相を帯びてきた。それは既に地下鉄サリン事件などに象徴されていた不気味な動きが、はっきりと姿を現した時期であるように思われる。おそろしい事件や大変なニュースを聞くことが日常的になった。9・11、イラク戦争、わが国の軍事化、憲法改正の動き、中国や韓国における反日デモなど国際的に緊迫した時代に突入した。この社会の変化と時期を同じくして私のエンカウンター・グループ観も今までとは異なる方向へ変化し始めた。

今となって考えると、以前から私の中にあった傾向のように思うが、私は心理臨床以外の方法による対人援助の本を読んだり番組を見るようになっ

た。ターミナルケア、福祉、宗教、ＮＰＯ、あるいは地雷撤去や環境破壊等へ取り組む人々の話である。その一方で、心理臨床の研究の多くがその心理臨床の研究のための研究のように思えるようになってきた。私にとってはエンカウンター・グループとともにフォーカシングも学部時代から大事な研究領域ではあった。しかし、この領域の研究もフォーカシングのためのフォーカシング研究のように思えるようになった。何より自分自身がかつてはそのような研究をしていたことに思い当たった。スーパーバイザーの神田橋條治先生にそのことを話すと、「殆どの研究はそうだよ」とおっしゃった。その言葉はそれまで私の中に無意識に流れていた思考を加速した。ほどなく、本書で提示した「目標志向的ＥＧ」という概念が私の中に生まれた。また、私は学生には「フォーカシングもエンカウンター・グループも、何かの目的のための手段として用いるように。決して、フォーカシングやエンカウンター・グループの発展のために、研究したり用いたりしないように」と言うようになった。

その一方で、東亜大学における下川昭夫先生との出会いもその流れを加速した。東亜大学は当時、臨床心理学研究室を学部と大学院に創設したばかりであった。私たち教員はその両方において、大学からの過剰な要求に行き詰まっていた。そうした状況において、教育の質をどうすれば高められるかを考え続けた。下川先生はもともと精神分析の訓練をうけていらっしゃった。しかし、先生は東亜大学で村山先生や私に出会うと、私たちが提案したエンカウンター・グループを縦横に教育に活用なさった。精神分析出身だから、というこだわりは持っておられなかった。そのおかげで村山先生も私も学派間の対立を意識せずに済んだ。私は下川先生の柔軟で鋭い知性に魅了された。そして、思った。日本のロジャーズ派の中にはエンカウンター・グループを“神格化”しているように思える人さえいる。しかし、エンカウンター・グループはあくまでも手段であると。エンカウンター・グループそのものが大事なのではなく、何かを実現するための方法として現時点で自分が用いうる手段として優れているからエンカウンター・グループを用いている、と考えるべきである。もし、その目的のために他の更に優れている手段があ

れば、それを用いたいと。

本書で提示した「目標志向的ＥＧ」とはまさにこのことである。私が「目標志向的ＥＧ」を考えるようになったために、下川先生のＥＧを用いることへのこだわりのなさ、に気づいたようにも思うし、下川先生のＥＧへのこだわりのなさを実感して、私の中の「目標志向的ＥＧ」という概念により自信を得たようにも思う。神田橋先生からそのお言葉をいただいたのも、下川先生と出会ったことも、私にとってまさに機が熟していた時である。出会いの不思議を有難いと思う。

私自身、エンカウンター・グループの意味を余り考えることなく、ある意味でそれを“神格化”していたので、“手段としてのＥＧ”という一見ＥＧから距離のある考えを持つようになってから、ロジャーズ派の人々からはかなり遠い立場にいるような気になった。一方で、ロジャーズその人には近づいた気がした。彼が言ったといわれる「自分はクライエント中心療法のためではなく、クライエントにとってよりよい援助法を見つけようと思っている」という記述が、私のその気持ちを支えてくれた。また彼が「自分のやり方は日本でどう受け取られているのか」と、日本のロジャーズ派の人に尋ねたと知って、ロジャーズ個人は自分の考案した方法を絶対とは思っておらず、常によりよい方法を目指して他の研究者との交流をしていると思った。このこともエンカウンター・グループを１つの手段としてみる私を支えてくれるように思えた。

ところで、私はそれまで長い間、どう考えてよいか分からない問題を抱えていた。学生の自由を尊重して下さる真にロジャーズ的な村山先生のおかげで、私は神田橋先生にスーパービジョンを受けるようになった。神田橋先生は次第に離れてきたとはいえ、かつては精神分析の大家である。私はロジャーズ派の指導教官を持ちながら、精神分析の先生に指導を受けていることをどう考えたらよいのか、長い間分からなかった。個人面接の実際場面においてはロジャーズ理論も精神分析理論も私の中では殆ど切れ目がないのに、それを理論的にどう考えたらよいかが分からず、学派アイデンティティが定まらないという感じを持ち続けていた。

エンカウンター・グループが自分の中で脱“神格化”されるにつれて、私の長い間のこの懸案がゆっくりと氷解し始めた。ロジャーズ派であるからという理由で、精神分析的な思考をしないでおくのは私には窮屈すぎることを意識するようになった。また、個人面接とエンカウンター・グループは別個のものであると自分の中で完全に切り分け、精神分析的な思考だけで面接をするのも私には合わないように思われた。そして、次のように思うようになった。大事なのは理論の使い分けではなく、クライエントへの貢献という目的である。理論はその目的のために利用するものである。そのように考えると学派間で意味ある議論が出来るし、よりよい理論を作り出す姿勢も生まれる。何よりも、ロジャーズその人がクライエントへの貢献のためにリサーチを積極的に取り入れようとしたのではないか、ということに思い至った。

「ロジャーズ派の研究・実践」とか「精神分析の研究・実践」などという枠組みが今でも学界では大勢である。そのために各学派の意味ある交流が行われていない。せいぜいあるのは「〜派との対話」というシンポジウム程度のことである。学派の枠組みを越えて実践するとなると「１つの方法をきちんと踏まえていない」などと両方の学派から批判が起こりそうである。日本で折衷派と呼ばれる心理療法が余り表舞台に立たないのはそのことを意味しているように思われる。理論的な統合・統一性を示す折衷派というものがいわゆる“折衷派”という学派であろう。しかし、理論的な統一性を示そうとする余り、カウンセラー個人が十分に機能するための“折衷”というあり様が注目されなさ過ぎているように思われる。

「目標志向的ＥＧ」という概念と共に、目標のために積極的にＥＧという手段を検証し、ＥＧという手段であっても修正、変更するという私の在り方は、いわゆる“ロジャーリアン”には受け入れてもらえないだろう。しかし、ロジャーズ個人はそういう積極的な探索の姿勢を終生持ち続けた人であり、他者への押し付けや中傷誹謗、破壊でない限り、むしろそういう姿勢を備えた人を対話の相手とするのではないか、というのが私のロジャーズ像である。彼が自分とエリクソンとコフートを比較した論文で、自分とエリクソンが似ていると述べていることも、私のそのロジャーズ像を強化した。その

意味で私は自分のイメージするロジャーズに少し近づけた気がした。

今、私は下川先生が始められた地域臨床（地域実践心理学）という視点で仕事を始めている。しばらく前までならエンカウンターやフォーカシング、個人面接にこだわって、このような仕事は出来なかっただろうと思う。以前はフォーカシングやＰＣＡの素晴らしさを世間に広めるにはどうしたらよいか、をロジャーズ派の１人として考えていたが、今はそれがなくなった。それどころか、そういう思考の仕方こそ、フォーカシングやＰＣＡの業界の懐の小ささを示すことになるのではないか、と思うようになった。今は手段に関して自由である。スーパーバイザーの神田橋先生が精神分析オンリーの世界から離れておられる姿勢も私には大きな支えになっている。

学位論文を書き始めてからの私の内部での激動は、本書の「問題意識性」の概念にも関連している。この概念を考えるようになったのは、本書に述べているとおり、エンカウンター・グループの事例を通してであって、それはメンバーの問題意識性についてであった。しかし、学位論文を完成した後は、メンバーに対してだけではなく、ファシリテーターやそのエンカウンター・グループの主催者に対しても問題意識性を注目するようになった。つまり、目標志向的ＥＧ観として何故エンカウンター・グループを行うのか、企画するのかという目標の重要性を本書では述べた。しかし、それだけでなく、ファシリテーターがその目標を頭だけでなく、実感として引き受けながらメンバーと関わる時は、問題意識性を膨らませているメンバーとの出会いが起こると思うようになった。

そして、既にグループを企画する段階で、あるいはファシリテーターを引き受ける段階で、オーガナイザーあるいはファシリテーターに問題意識性が高まっていることが、「目標志向的ＥＧ」であることと同時に重要ではないか、と思うようになった。つまり、何のためにこのＥＧを行い、そのことを現在のグループの中で自分個人の問題意識として実感している、というあり様が重要ではないかということである。このあり様は、福岡人間関係研究会が未だその名前もつく前の状態であった時の村山先生やそのメンバーたちに典型的に見られるように思われるし、また、不登校の親のグループをなさっ

ている時の小野修先生がそうだと思われる。

スタッフ側の問題意識性を考えるようになって、ロジャーズがエンカウンター・グループによる平和プロジェクトを構想した、その時の彼の内面を思うことが多くなった。ロジャーズの平和プロジェクトが目標志向的ＥＧであるのは言うまでもない。推測することを許してもらえば、同時に彼の中では平和という目的と自分が今、このＥＧの場に居るということがフェルトセンスレベルで連続して感じられていたのではないかと思われる。いや、平和プロジェクトだけではない。カウンセラー養成のためにエンカウンターを始めた当初から彼はそのような在り方だったのではないかと思う。晩年の彼の論文に、presence について述べたものがある。自分がグループの中に存在しているだけで促進的に機能しているようだ、という部分は、そこだけ読むと、ロジャーズだけが到達しうるトランスパーソナルな特殊な次元のように思えてしまう。しかし、深い問題意識を抱えたもの同志が集まる場では、必ずしも言葉は必要ではなく、そこにいるだけで互いにとって支えになるということは、深い心の傷を負ったもの同士のセルフヘルプ・グループなどではかなり頻繁に起こっている癒しではないか、と想像する。

１年ほど前、私は人間関係研究会というロジャーズ派の偉い先生方がお集まりになった研究会をさんざん迷った末に辞めさせていただいた。また、日本フォーカシング協会のコアメンバーも辞めさせていただいた。後者は別の事情からではあったが、結果的には自分の方向に沿った決断であったと今は思っている。このようにロジャーズ派としての“鎧”を少しずつ脱いでいくことで私自身は自由になり、一方でロジャーズ個人には近づいている感触がある。独断と偏見も極まれりといった所であるが、このような私を村山先生や神田橋先生が支えて下さっている。私にはかけがえのない支えである。ロジャーズが精神分析家のスーパービジョンを引き受け、その精神分析的枠組みを尊重したという話が思い出される。

学位論文作業を含むここ６年間の私個人の内側の流れを記した。今後、私は当面、地域実践心理学という方向で進むだろう。しかし、更にそれがどの

ような流れになるのかよく分からない。以前は足場の定まっていないそのような自分に不安を覚えていたが、今は逆に、そのような自分が楽しみであると感じている。学派的背景やアイデンティティは不安定になる一方であるのに、自分自身は間違った方向の努力はしていないという感じは確かにある。こうした流れが自分の中に起こっているのは、上に記した多くの先生方や、これまで出会った多くの人々のおかげであると温かい感謝の気持ちが起こっている。

本書の出版にあたっては学校法人関西大学に多くの支援をいただいた。また、同出版部の課員の方々には遅々として作業の進まない私を粘り強く支えていただいた。心より感謝申し上げます。最後に、妻肇子と２人の娘、優風と万葉、そして両親にも感謝の言葉を付け加えさせていただきたい。

平成17年７月

著　　者

索　　引

あ

安部恒久　14.17
網の目　207.210.214
行き詰まり
118.119.143.146.151.154.156.178.184
一般的目的　23.24.193
逸楽行動
10.11.18.32.37.40.47.66.70.85.112.116.119.151.184
伊藤義美　9.10.14.17.22
いま、ここ(今、ここ；今・ここ)
5.16.67.88.150.154
意味付け　36.37.44.47
岩村聡　8.9.154.191
印象の問いかけ　94.113
印象フィードバック
47.73.74.93.113.114.116.148.176.202.209
動かされる姿勢　182.184.207.211
内なるファシリテーター　198
エリクソン(Erickson. M.)　218
大須賀克己　14.16.115.152
大須賀発蔵　14.16.115.152
大築明生　9
小野修　44.212

か

回避　116.143.151
カウンセラー養成　3.192
関わりの模索　10
仮説　26
語り口調　180
河合隼雄　202.218
関係性の網の目有機体　210.211
看護学生　4.9
看護師　4.23.201
技術的ファシリテーション　209
既知のメンバー　10.13.202
気づき　42.43.62.63.64
技法　15.24
技法論　24.27
共感的理解　5.15
強制参加　12.19.20.45.146.154.202
共存　6.7.22.23.189
拒否感　12.19.40.144
グループの信頼　180
グループの潜在力　16.19.20.74
グループへの信頼　15
傾聴　15.18.72.85.94
権威　144.147.154.156.179.184
言語化　146.154.156.178
研修型　8.9.17.21.48.188
研修プログラム　13.19
現状維持的反作用　203.216
構成型　16
高展開　21
心構え　15
個人開示的ファシリテーション　209.211
個人的仮説　75.85.92.154.189
個人的側面　156.180.184.212
固定的な問題意識　195
個別目標　24.48.53.70.190.193

さ

坂中正義　8.9.10.15
雑談　10.18
サブグループ　10.11
ジェンドリン(Gendlin. E.)
41.63.64.66.200.208
自己一致　5.16.18.20.86.184
自己開示
10.15.16.92.94.114.144.146.156.
176.184.212.217
視点の変換　63.64
自発参加型　8.9.17.21.48.188
自発性　9.19.37.40.45.47
下田節夫　14.16.17.19.154
集中的グループ体験　4
熟練　2.6.12.21.22.184.189
主体性　12.19.120
受容
5.17.18.20.32.37.47.51.70.72.85.
92.94.204.206.208
情報開示　92.152.154
事例研究　26.28
心理的安全感　15.19.93.148.219
心理的成長　6.22.37.40.45.47
心理的損傷　43.67.76.90
心理療法　24.27.64
心理臨床　4.218
スケープゴート　15.183
スリーテン　17
セッション外
33.34.39.40.42.43.44.46.48.63
専門性　16

た

体験が尾をひく　36
体験学習　12
体験過程　66
多様性　6.7.23.26.189
沈黙　10.13.22.86
津留春夫　22.92.152
出会い　5.75.120.149.154.156.218
哲学　6.7.15.22.23.33.154.188.189.216
土居健郎　13
動機づけ　9
同型的自己開示　215

な

中田行重　8.9.10.11.12.22
永野浩二　8.9.10.12
人間関係研究会　4
人間性　16.120.154.156.184
人間性回復運動　3
能力の限界　180.181.186.213
野島一彦
5.7.8.9.14.17.21.22.40.51.75.114.
117.152.153.183.188.191.198.212

は

箱根方式　17
畠瀬稔　4.14.15.154
林もも子　5.7.8.51.154
反作用　156.204
否定的　156.176.179.186.217
開き直り　87.180
平山栄治　5.8.9.39.40.51.114.146
ファシリテーションシップ　5
ファシリテーションの困難　1.12
ファシリテーション論
14.17.19.24.26.151
ファシリテーター論　216
フェルトシフト
41.43.46.47.52.62.64.69.195.201

フェルトセンス
42.64.68.85.113.176.184.195.201.
208
フォーカシング　200
福井康之　22
福岡人間関係研究会　4
フロイト(Freud. S.)　23
プロセス論　51.52.89.198.200
文化的孤島　36
ベーシック・エンカウンター・グループ
3
変易的な問題意識　195
保坂亨　14.15.33.39.43.46
ポラニィ(Polanyi. M.)　28

ま

増田實　4.15.17
未熟　156.179.181.189.213
村山正治　4.8.14.26.36.51.198
無力感　183.213
目標志向的ＥＧ　191.206.212.216
問題意識
49.51.62.64.68.85.113.141.176.211
問題意識性
70.75.85.112.119.141.156.176.193.
198.201.204.212

や

役割意識　182
有機体　207.210.214
融合的透明　214
養護教諭　4.9.65.201

ら

来談者中心療法　5
リーダーシップ　16
レヴィン(Lewin. K.)　3
連鎖的　210.214
ロジャーズ(Rogers. C.)
3.4.5.14.15.16.20.28.46.71.184.
186.194.214.216.218

その他

Bion. W.　14
ＥＧ観　2.21.22.23.26.188.191
ＥＧ像志向的ＥＧ　191.206.212.216
ＰＣＡ 3.6.7.20.22.23.32.188.216.218
The Steel Shutter　193
Verhest. P.　186.211

〈著者紹介〉

中田　行重（なかた　ゆきしげ）

1961年　生まれ
1984年　九州大学教育学部卒業
1992年　九州大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学
1992年　九州大学教育学部助手
1993年　下関市立大学経済学部　専任講師のち助教授
1999年　東亜大学総合人間文化学部　助教授
2001年　博士（学術）取得（東亜大学）
2003年　関西大学文学部　助教授
2004年　関西大学文学部　教授

主な著書

『現代のエスプリ〔別冊〕ロジャーズ学派の現在』(共著, 至文堂, 2003年)
『コミュニティ・アプローチ特論』(共著, 日本放送大学出版会, 2003年)
『地域実践心理学』(共著, ナカニシヤ出版, 2005年)

問題意識性を目標とするファシリテーション
－研修型エンカウンター・グループの視点－

平成17年12月1日　発行

著　者　中田行重（なかたゆきしげ）

発行所　関西大学出版部
〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
電話 06(6368)1121 ／ FAX 06(6389)5162

印刷所　株式会社　高速オフセット
〒530-0001 大阪市北区梅田3丁目4番5号
(毎日新聞ビル6F)

©2005　Yukishige NAKATA　　Printed in Japan

4-87354-424-6 C3011

落丁・乱丁はお取り替えいたします

ISBN4-87354-424-6

C3011 ¥3500E

9784873544243

定価（本体3,500円＋税）

1923011035009